

高野山大学論叢 第31巻 抜刷
平成 8 年 (1996) 2月 印刷

パーラ朝の文殊の図像学的特徴

森 雅 秀

パーラ朝の文殊の図像学的特徴

森 雅 秀

1. はじめに

観音や弥勒とならぶ大乘仏教の代表的な菩薩である文殊は、密教の時代においても高い人気をほこった。『維摩経』や『華嚴経』入法界品において、文殊がもっとも重要な菩薩として活躍することはよく知られている。初期・中期密教においても『文殊師利根本儀軌経』(Mañjuśrī-mūlakalpa)⁽¹⁾や『文殊師利名等誦経』(Mañjuśrīnāmasaṅgīti)のように、文殊を中心に構成された経典が現れた。密教の時代にはさまざまな種類の文殊が登場するようになったこともよく知られている。成就法文献として著名な『サーダナマラー』(Sādhana-mālā)には十種類以上の異なった名称の文殊の成就法が紹介されている。この中にはマンジュヴァジュラ Mañjuvajra のようにマンダラの中尊となる高位の文殊も含まれる。密教パンテオンにおける如来の数の増加や多様化にともない、諸仏の源となる尊格があらたに生み出されるようになる。このような仏を本初仏(ādibuddha)と呼ぶが、本来、仏よりも位が低いとされる菩薩から、とくに選ばれて本初仏となる尊格もあった。金剛薩埵や普賢とともに、文殊も本初仏となった「特別な」菩薩である。これらの菩薩に共通しているのは、仏の説法を聞く聴衆、すなわち対告衆の代表であり、とくに文殊は智慧の菩薩として知られた尊格である。また、チベットの最大宗派であるゲルク派も文殊を本初仏とみなし、その開祖ツォンカバは文殊の化身であると信じられている。

パーラ朝の仏教美術、およびオリッサ地方の密教美術においても文殊は重要な位置にある。これらの地域から出土した作例数を調べてみると、釈迦仏、観音、ターラー Tārā について文殊の作品は多い。菩薩のクラスでは他の弥勒や普賢の作例もいくつか知られているが、観音や文殊の作例数は、これらをはるかに上回る。文殊が智慧の菩薩であるのに対し、観音は慈悲の菩薩としばしば言われる。この両菩薩の作例の豊富さは、密教の時代においても伝統的な大乘の菩薩に対する信仰が、仏教徒の間では依然として優勢であったことを示している。ただし、この二尊の作例数を比較すると、観音の数は文殊の二倍以上で、あくまでも観音が菩薩信仰の中心にあったことは、チベットや中国、日本と同じである。

インドにおけるパーラ朝以前の文殊の作例はほとんど知られていない。ガンダーラ出土の梵経をもつ脇侍菩薩が文殊である可能性が指摘されているが⁽²⁾、明らかに文殊と断言できるのは、エローラ石窟の八大菩薩の中の作例まで待たなければならぬ⁽⁴⁾。インドにおける文殊の造像活動は、

パーラ朝の時代になってはじめて本格化したと言ってよいであろう。

密教の文殊に関しては、すでに頼富本宏氏による詳細な研究が三編ある(1985, 1988a, 1988b)。このうちはじめの一編では文献に記された文殊の図像学上の特徴が整理されている。残りの二編では現存する文殊の作例を中心に、尊名比定と各尊の特徴の記述が行われている。また頼富氏と下泉氏による『密教仏像図典』(1994)にも、文殊に関する有益な情報が含まれる。この小論もこれらの先行研究に多くを依っているが、頼富氏の論考には紹介されていない作例もいくつか取り上げ、また尊名比定や分類において若干異なった見解も示したい。このほかにインドの文殊については、インドの密教美術全般をあつかった Bhattacharyya(1968a), Saraswati(1977), Huntington (1984) などの研究や、Mallmann (1964) による浩瀚な文殊研究がある⁽⁶⁾。

2. パーラ朝の文殊の図像学的特徴

概 観

パーラ朝の支配下にあった現在のベンガル、ビハール地方、そしてこれらの地域の南に位置するオリッサ州から出土した文殊の数は、140例近くにのぼる⁽⁶⁾。このうち約90点はベンガル、ビハール地方から、残りの大半はオリッサからの出土である。オリッサからの出土は全体の約3割であるが、これは当時、人気の高かった観音やターラーなどの他の尊格におけるオリッサ出土数が占める割合にほぼ一致する⁽⁷⁾。ただし如来像はオリッサからの出土が5割近くを占めるため、これに比べればその割合は若干低い⁽⁸⁾。

文殊の作例のおもな出土地を見てみると、ビハール州のナーランダ Nālandā 遺跡からの出土例が突出している。その数は約30例にのぼり、この時代の文殊の出土数の約4分の1がこの地から発掘されたことになる。これとならんでオリッサのラトナギリ Ratnagiri 遺跡からもほぼ同数の出土例がある。ただしその3分の2に相当する19例は奉獻小塔の龕の中の浮彫で、比較的小規模な作品である。このほかに、現在はバングラデシュの領土内であるかつてのベンガル地方西部や、ラトナギリとならぶオリッサの代表的な密教遺跡ラリタギリ Lalitagiri からの出土例も比較的多い。パーラ朝の版図からははずれるが、サータヴァーハナ朝やグプタ朝の時代に仏教美術が栄えたアマラヴァティー Amaravatī やサールナート Sārnāth からも若干の出土例がある。

まずはじめにこの時代の文殊の一般的な特徴について簡単にまとめておこう。

ほとんどの文殊が一面二臂である。ただし、マンジュヴァジュラやナーマサンギーティと呼ばれる特殊な文殊は多面多臂をとる。上半身は衣装は付けず、一般に菩薩が身につける臂釧、腕釧、聖紐を飾る。腰から下はドーティをまとう。これらの一般的な衣装や装身具の他に、文殊のみに見られる独特の璽珞と耳飾りがある。首にかける璽珞は、多くの場合、中心部分に長方形と三日月型の宝石をあしらひ、さらにその下には大きな円形の飾りを下げる。観音や弥勒などの他の菩

薩の瓔珞に比べると、全体の長さはかなり短い。また、耳飾りは大きな円、または楕円の形をしている。これも他の尊格には見られないものである。

髪型は日本の文殊の場合、一髻、五髻、八髻など、もどりの数によって文殊の種類を定める伝統があるが、インドの文殊の場合、もどりの数にはそれほど注意は払われなかったようだ。全体はひとつにまとめて結び、結わえた髪を肩や背中にたらす、垂髪の形態で表現されることがもっとも多い。したがってもどりの数から見れば一髻であるが、中央のもどりの左右にも起伏をつけた三髻のような表現も見られ、なかにはもどりをいくつかの浮彫の形で表し、五髻を意識した作例もある⁽⁹⁾【110】。髪のはえぎわには髪飾りをつける。

これらの独特な装身具や髪型はいずれもヒンドゥー教の童子神スカンダ Skanda (カールティケーヤ Kārtikeya) と共通するものであることは、すでに指摘されている⁽¹⁰⁾。そして、文殊よりもスカンダの作例の方が古い時代から知られていることから、文殊のイメージの確立にスカンダが影響を与えたとみて間違いのないであろう⁽¹¹⁾。スカンダの図像学上の特徴のひとつである孔雀の座は文殊にはほとんど見られないが、台座や足元に表現されたものがわずかにある。またスカンダはしばしば六面六臂で表されるが、この特徴は教学上、文殊が忿怒相をとった尊格と考えられているヤマーンタカ Yamāntaka (大威徳明王) に受け継がれている⁽¹²⁾。

この他の髪型として、観音のように高く結び上げた髪髻冠や、宝冠をいただいたものがある(図15, 16)。また巻き髪を二重、三重と重ねた巻き貝のような形もわずかに見られる【83, 119】(図8)。髪中央に坐像の化仏が表現される作例も多く、これらの大半は触地印仏である。文殊が所属する部族(kula)の上首である阿闍であろう。

持物は文殊の種類によって異なるが、全体を通じてもっとも多い持物が睡蓮(utpala)、あるいは梵経を載せた睡蓮である。このほかに、剣と梵経の組み合わせがアラパチャナ Arapacana と呼ばれる文殊の持物として一般的で、多臂像の場合、弓や矢などの武器を持つ。印相は与願印を右手で示す例が圧倒的に多く、その場合、左手は睡蓮あるいは梵経を載せた睡蓮という組み合わせになる。施無畏印、転法輪印、定印の作例もいくつかある。

坐像と立像の比率は約三対一で、坐像がかなり多い。しかし、中国や日本の文殊の大多数が坐像で、立像の作品が限られていることに比べると、約四分の一が立像であるという点は注目値する。坐像の場合、遊戯坐がもっとも多く、ついで輪王坐、結跏趺坐、椅坐がある。獅子の上に坐る例や台座に獅子が表現されることも多い(図1, 2)。立像はほとんどの作品が、わずかに腰をひねりながらもほぼ正面を向いて表現され、等足立(samapada)に近いものもしばしば見られる【109, 111など】(図11, 12)。

脇侍が表現される作例も多く、男尊一尊(図12)、男尊二尊、男尊一尊と女尊一尊(図13, 14)、女尊二尊(図1, 15, 17, 18)の四つのパターンがある。このうち男尊二尊の組み合わせはヤマーンタカと善財童子 Sudhanakumāra であろう。ヤマーンタカは単独の脇侍や女尊一尊との組

み合わせの場合にも登場する。善財童子は『華嚴経』入法界品において求道の旅を続ける主人公として知られるが、文殊はこの經典に登場するもっとも重要な菩薩である。女尊の脇侍については『サーダナマーラー』の中で言及されるケーシーニ Keśinī とウパケーシーニ Upakeśinī に比定されることもあるが、単なる供養女である可能性もある。

これらの図像学的な特徴にもとづきパーラ朝の時代の文殊を分類し、以下に各グループのおもな特徴をまとめてみよう。観音と同様に文殊にもいくつかの種類があることはすでに述べたとおりである。Getty は14種、Bhattacharyya は12種の文殊を紹介するが⁽¹³⁾、いずれも『サーダナマーラー』の記述にもとづいたもので、作例によるものではない。ここでは、このうち、図像学的な特徴が文献の記述にほぼ一致しているアラパチャナ、マンジュヴァラ Mañjuvara、マンジュヴァジュラ、ナーマサンギーティ Nāmasaṅgīti、スティラチャクラ Sthiracakra のみを、特定の名称を冠した特殊な文殊としてあつかい、残りの尊については、一般的な文殊としてまとめ、坐法、印相にしたがって分類する。特殊な文殊はいずれも坐像であるが、スティラチャクラのみは立像の作例が一例ある。したがって、立像の文殊はこの一例をのぞき、すべて一般的な文殊に含まれることになる。この分類にもとづく出土数を地域別に以下に示そう。

	ベンガル・ビハール	オリッサ	その他	不明	合計
アラパチャナ	3	7	1	0	11
マンジュヴァラ	10	8	0	2	20
マンジュヴァジュラ	2	0	0	1	3
ナーマサンギーティ	0	0	0	1	1
スティラチャクラ	0	1	0	1	2
遊戯坐・与願印	5	18	2	2	27
遊戯坐・その他の印	3	1	0	0	4
輪王坐	10	5	0	4	19
結跏趺坐	4	1	1	2	8
その他の坐像	3	0	0	0	3
立像・与願印	16	10	1	1	28
立像・施無畏印	3	1	0	0	4
合計	59	52	5	14	130

アラパチャナ

「アラパチャナ」とは五字からなる文殊の真言である。この名称を冠した文殊はこれまで11例出土している。オリッサのラトナギリからはこのうちの6例が出土しているが、これらは奉獻小塔の龕中の作品である。11例の作品はいずれも同じ持物を持つ。すなわち右手で剣を振り上げ、左手で梵経を胸の前に持つ。からだの左側に睡蓮が表される作例もあるが、文殊一般に見られる持物としての睡蓮や梵経を載せた睡蓮はない。髪型は垂髪の場合と宝冠をいただく場合の両者がある。結跏趺坐で坐る点は共通し、一般に文殊の坐法に見られる遊戯坐の例は一例もない。これ

らの特徴はいずれも『サーダナマーラー』の規定通りである。髪型については言及されないことも多いが、「五種の宝で飾る宝冠」と規定する成就法が一点ある。ニューデリーの国立博物館所蔵のアラパチャナ文殊には、台座の裏側に二羽の孔雀の装飾が見られる[1]。先述のように文殊の作例に孔雀が表現されることはまれであるが、これはその数少ない例のひとつである。

ダッカ博物館の作例は文殊自身は他の作品と同様であるが、周囲や光背に独特の表現が見られる[11]。台座の中心と光背の最上部、そして文殊の両足の後ろに合計四体の小さな像が表されている。中央の文殊と同じように結跏趺坐で坐り、右手で剣を振り上げる。さらに光背の上部左右には四尊の仏坐像の浮彫もある。四仏はそれぞれ異なった印を結ぶ。中央の文殊の宝冠にも化仏の浮彫があり、これとあわせて金剛界の五仏が表現されているらしい。この作品は古くから Foucher, Grünwedel, Bhattasali らによって紹介され、これらの周囲の尊も『サーダナマーラー』の記述に一致することが指摘されている。『サーダナマーラー』所収のアラパチャナ文殊の成就法によれば、アラパチャナの脇侍は光網 Jālinīprabha, 月光 Candraprabha, ケーシーニ, ウパケーシーニで、いずれも中尊の文殊と同じ姿をとる。光背や化仏として表現された五仏も、「五人の勇者」(pañcavīra)として言及されている。成就法に忠実に依拠した作例と言うことができる。

マンジュヴァラ

転法輪印を結び、遊戯坐で獅子に乗るマンジュヴァラは、特定の名称を冠した文殊の中ではもっとも作例が多い。転法輪印を結ぶため、特定の持物は持たないが、アラパチャナと同じように、からだの左側に睡蓮、あるいは梵経を載せた睡蓮が表現される。また梵経を載せた睡蓮が体の左右から伸びる作例もいくつかある。文殊が乗る獅子は、文殊の下に大きく表現される場合(図2)と、台座の左右に小さく表される場合(図1)がある。坐法は遊戯坐がもっとも多いが、結跏趺坐[25]や椅坐の例もある[27, 30, 31]。椅坐はラトナギリ出土の奉獻小塔の龕中の作品に多く見られる。

マンジュヴァラ自身の尊容は一定であるが、脇侍や光背の表現に注目すべき作例がある。左右に善財童子とヤマーンタカを脇侍として置き、さらに光背に五仏の浮彫を表現した作例で、20例のうち5例がこれに相当する[12-16]。興味深いことにいずれもベンガル地方からの出土品で、それ以外の地域からの報告はない。光背の五仏の配置には一定の法則は見られないようである。光背にはさらに仏塔の浮彫や、向かって右側の睡蓮と左右対称となる位置に蓮華の浮彫がほどこされるものもある。特別な脇侍を持つ例として、現在、バングラデシュ領内のマイナーマティ Maināmati のサルバン・ヴィハーラ Salban Vihāra から、左右に女尊の脇侍、上部に定印仏、台座中央には輪王坐の菩薩の四尊を配し、椅坐で坐る文殊が出土している[17]。転法輪印を示すため、マンジュヴァラに比定したが、台座の獅子は表現されず、他に類を見ない構成である。

その他に、左右に女性の脇侍を置く作品[18]と男性の脇侍を置く作品[26]が一例ずつ知られているが、それ以外はいずれも脇侍をとまわらない単独像である。

マンジュヴァジュラ

三面六臂のマンジュヴァジュラは、文殊としてはめずらしい多面多臂像である。マンジュヴァジュラは『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājatantra*)のジュニャーナパーダ流の32尊マンダラや、『幻化網タントラ』(*Māyājālatantra*)にもとづく43尊マンダラの中尊で、タントリズムの色彩の濃い尊格である。文献には三面六臂の他に四面八臂のマンジュヴァジュラも現れるが⁽⁹⁾、実際の作例は三面六臂に限られる。現在、三点のマンジュヴァジュラが報告されている。このうちのブロンズの一点[35]はネパール、あるいはチベットにおける制作である可能性もある。残る二点はナーランダーとベンガル地方からの出土である。持物はナーランダー出土の作品[33]では、右手に剣と矢、左手に梵経、睡蓮、弓で、残る右手は与願印を示す。ベンガル地方から出土した作品[34]とブロンズ像は、いずれも二臂を胸の前で交差させ、残りの右手に剣と矢、左手に梵経を載せた睡蓮、弓を持つ。交差させた手は「明妃を抱擁する」という文献の記述にしたがったものと考えられるが⁽⁹⁾、実際には明妃は表現されていない。それ以外は文献の記述によく一致する。

ナーマサンギーティ

チベットやネパールで人気の高かったナーマサンギーティの作例はインドでは一例しか知られていない[38]。一面八臂をそなえ、頭上で合掌する一組の手がこの尊固有の特徴である。残りの三組の腕のうち、一組は定印、一組は胸の前で手のひらを前に示し、残りの一組はからだの左右でひじをたてる。最後の一組は何か持物を持っているようであるが、写真図版からは詳細は明らかではない。結跏趺坐の坐法を含め、左右の対称性が強調された尊容をとる。

スティラチャクラ

スティラチャクラには坐像と立像が一例ずつある[36, 37]。坐像は遊戯坐である。いずれも右手は与願印を示し、左手は睡蓮を持ち、睡蓮の上には剣が直立している。髪は髻髻冠を結び、中央に化仏が表現されているが、印相などは不明である。立像の左右には女尊が一尊ずつ蓮台に乗る。一方、坐像の作例では左ひざのあたりにヤマーンタカが小さく表現される。睡蓮に剣を載せる点をのぞけば、スティラチャクラは次に述べる一般の文殊と同じ特徴を持つ。

遊戯坐・与願印

パーラ朝の文殊でもっとも作例が多いのが、右手で与願印を示し、遊戯坐で坐る文殊で、29例

ある。左手には梵経を載せた睡蓮を持つことがもっとも多い(図4)。梵経が確認できず、睡蓮のみの作例は数点にとどまる。獅子に乗る作例は一例もなく、台座に獅子が表現された作品を2点数えるのみである。サーンチャー出土の孔雀を台座付近に表現した文殊も、遊戯坐で与願印を示す。二尊の女尊を光背上部に置く作例がラリタギリから一例[56](図6)出土しているのをのぞき、いずれも脇侍をともしない単独像である。髪型は中央に大きなもとどりを結び、その左右にも起伏をつけて垂髪として肩にかける形態のものももっとも多く、髪髻冠や宝冠の例や、巻き貝のような髪型も見ることはない。形態に地域差や時代による変化はほとんど認められず、この時代の文殊の標準的なスタイルとして、このタイプの文殊が広く知られていたことが予想される。

なお、頼富氏をはじめ多くの研究者は、このタイプの文殊をシッダエーカヴィーラ Siddha-ekavira と比定する。『サーダナマラー』の規定するこの尊の尊容はこれらの作例にほぼ一致するが、さらに同書には阿闍の化仏や五仏の宝冠などの言及があり、実際の作例では表現されていない要素もある。また坐法に関しては結跏趺坐が指定されている。右手で与願印を示し、左手に梵経を載せた睡蓮を持ち、遊戯坐で坐る一般的な文殊に、密教的な要素を加えて作り上げた文殊がシッダエーカヴィーラであると考えられる。

遊戯坐・その他の印

遊戯坐の文殊像のほとんどが右手で与願印を示すなかで、これとは異なる印相を示す作例が数点ある。ナーランダーのブロンズ像[66]は右手の手首から先が欠損しているが、残りの部分から推測して、おそらく施無畏印をとっていたと考えられる。やはりナーランダー出土のブロンズの小像[67]は、はっきりと施無畏印を示している。ただし左手の持物が直立した剣を載せた睡蓮であるため、すでに述べたスティラチャクラである可能性もある。クルキハール Kurkihār からは与願印でも施無畏印でもない印相をとった文殊が出土している[68]。わずかに拳を握り、胸の前に置く。左手の持物は睡蓮である。ラトナギリからは下半身と左手の持物である梵経を載せた睡蓮のみの断片が出土しているが、与願印であれば当然右腕が表現されている部分にはその姿はなく、与願印以外の印を示していたと考えられる[69]。

輪王坐

遊戯坐について多い坐法が輪王坐である。『サーダナマラー』の第69番「大王の遊戯の文殊成就法」(Mahārājajilāmañjuśrīsādhana)には「身色は黄色で一面二臂、五人の勇者(五仏)をともしない、童子形で、すべての装飾で飾られ、左手には睡蓮を持ち、右手は遊戯の足の上に置き、獅子座の上の蓮華と月輪の上に坐る」とある。遊戯坐のひざを立て、この上に右手を載せた、いわゆる輪王坐をとる文殊の姿が描かれている。輪王坐をとる文殊の作例は14例ある。い

ずれも文献の記述にほぼ忠実であるが、獅子が表現される例は少なく、直接、文殊の台座として表されるものが2例[83, 84]、台座の左右に小さく表現される例が一例[72]あるのみである。五仏も表現されていない。持物は梵経を載せた睡蓮がほとんどであるが、かわりに睡蓮のみを持つ例もある[70, 71など]。やはり輪王坐をとるが、右ひざではなく左ひざを立て、この上に左手を置き、右手で施無畏印を示す例が4点ある[85-88]。いずれも獅子の背に直接乗る。文殊の異称としてしばしば用いられるマンジュゴーシャ Mañjuḡṣā をこの作例に当てる場合もある。

結跏趺坐

結跏趺坐の文殊の作例は8例ある。このうち6例は右手が与願印、左手は梵経を載せた睡蓮を持ち、坐像の中でもっとも多い遊戯坐の文殊とは坐法のみが異なる。残りの2例は、一例は剣と梵経を持ち[94]、もう一例は定印を結ぶ[96]。

立像

文殊の立像は、すでに述べたスティラチャクラをのぞけば32例ある。このうち施無畏印の作品はわずかに3例[118-120]で、残りはすべて与願印である。左手の持物は坐像の場合と同様、睡蓮、あるいは梵経を載せた睡蓮に限られる。髪型はもとどりを結び、垂髪で表現される例がやはり大多数を占めるが(図8, 10)、髮髻冠、宝冠の例も散見される[127, 130, 131など]。

坐像、立像という違いをのぞけば、文殊自身の図像学的な特徴は両者の間でほとんど変わらない。しかし坐像の作品ではマンジュヴァラのような特殊な例を除き、一般の文殊は単独で表現されることが普通であったのに対し、立像の場合、脇侍をともなう作例が単独尊よりも多いという逆転現象が起こる。とくにオリッサからの出土例では、単独像がわずかに一例[121]であるのに対し、何らかの脇侍をともなう例が9例を数える。このうちの何例かは八大菩薩のセットの一部である。文殊の脇侍はすでに述べたように、一尊のみの場合はヤマーンタカ(図12)、二尊の場合はヤマーンタカと女尊(図13, 14)、あるいは二尊の女尊(図19, 20)である。

マンジュヴァラで見られた善財童子とヤマーンタカの組み合わせの作品も一例ある[117]。出土地はやはりベンガル地方である。この作品には光背に五仏の坐像が表現され、また文殊の右側に蓮華が表されるなど、他の立像には見られない特徴がある。さらに文殊に固有の瓔珞の表現も、通常のものとは異なり、勾玉状の宝石をつらねた独特の形態で表されている。これらの特徴はすでに述べたベンガル地方から出土した、光背に五仏を置いたマンジュヴァラの作例と共通する。そこで見られた地域的な独自性が、立像にもおよんでいると見ることができる。

二人の女尊の脇侍をともなう作例は7例[116, 125-8, 130, 131]あるが、サールナート出土の一例[116]をのぞき、残りの作例はすべてオリッサ州からの出土である。すでに述べたように、文献に言及されたマンジュヴァラの四脇侍のうちの女性の二人、ケーシニーとウパケーシニーに

比定することも可能である。しかし、この地から出土する他の菩薩立像にも同様の女性像がしばしば現れることから、オリッサ、とくにカタック地区の菩薩に特有の脇侍表現と見た方が自然かもしれない。

3. おわりに

以上概観したように、パーラ朝期の文殊は大多数が一面二臂で与願印と睡蓮を持って表現される。その場合、坐像と立像の両者が現れ、坐像の場合は遊戯坐をとることがもっとも多かった。これは時代や地域の制約を受けることは少なかったと考えられる。このような一般的な文殊とは別に、密教的な文殊とも呼ぶことができる特殊な文殊も作られた。これらは『サーダナマーラー』などの文献の記述に忠実な、図像学的な特徴が確立した文殊である。その一方で、光背や脇侍に関しては、文殊の種類を超えて、特定の地域のみで見られる独得のスタイルが存在していたことも予想される。

付記

本研究は名古屋大学文学部教授宮治昭先生主催の共同研究会「パーラ朝美術研究会」の成果の一部である。本稿執筆にあたり、宮治先生からは貴重な図版資料を多数、貸与いただいた。記して謝意を表します。また、本稿は文部省科学研究費補助金による国際学術研究「マンダラの理論と実践の比較研究」（研究代表者・立川武蔵、課題番号 05054013）による研究成果の一部でもある。掲載した図版はすべて筆者自身の撮影によるものであるが、写真撮影にあたり、Orissa State Museum, Indian Museum (Calcutta), Patna Museum, Bodhi Gaya Museum, Nalanda Museum および Archaeological Survey of India の各機関にご協力いただいた。さらに、オリッサ州における現地調査ではプーナ大学助手 Y. Kar 博士、ビハール州ではパトナ博物館学芸員 O. P. Panday 博士のご助力を得た。各位に対し甚深の謝意を表します。

注

- (1) 大乘仏教の文殊については菅沼（1988）参照。日本の仏教美術を中心とした文殊の図像研究は、金子（1992）がくわしい。
- (2) Bhattacharyya (1968b) によるエディションでは第44番から第83番に相当する。これらの名称は頼富（1985：331-332）にもまとめられている。
- (3) 宮治（1985：21）
- (4) エローラ石窟の八大菩薩の文殊については伊東（1981）、Malandra（1993：Fig.203）参照。
- (5) このほかに文殊一般に関する先行研究は金岡秀友博士還暦記念論文集刊行会（1988）の巻末の参考文献にくわしい。ここに含まれないものとしては井上（1985）、下松（1994）、山下（1995）などがある。
- (6) 文殊は八大菩薩の中の一尊としても表現される。オリッサのカタック地区からは、単独像八体からなる八大菩薩のセットの他に、仏の脇侍として光背に八大菩薩が表現される例がいくつかある。またベンガル・ビハール地区からはひとつのパネルに八大菩薩が表された作品が出土している。ここでは単独像のみを取り上げ、このような光背やパネルの八大菩薩の中の文殊は扱わなかった。八大菩薩については頼富氏の一連の研究があるが、近年『密教仏の研究』（1990）の中にまとめられた。
- (7) 佐久間・宮治（1993）によれば、観音の全体の出土数は282例で、このうちオリッサからの出土数は約

100例である。またターラーに関しては155例中の約50例がオリッサから出土している。ターラーの出土数は森(1990-2)による。

- (8) 宮治氏が紹介するベンガル・ビハール地方からの如来の出土例は282点を数える(1993)。これに対しオリッサからは約200例の如来像が出土している。
- (9) []内の数字は次頁以降の「パーラ朝の文殊作例リスト」の通し番号を示す。
- (10) 頼富(1988b: 15)
- (11) 文殊のイメージ形成にスカンダ(カールティケーヤ)が与えた影響については、山下(1995)による論考がある。
- (12) インドのヤマーンタカの作例は二例あり、いずれも六面六臂六足をそなえる(森 1990)。ヤマーンタカは文殊の脇侍としてしばしば登場するが、その場合は一面二臂で表現される。
- (13) Getty (1962: 109), Bhattacharyya (1968: 15-31), Liebert (1976: 171).
- (14) 第65番 (Bhattacharyya 1968b: 131).
- (15) Bhattasali (1929: 28-29)
- (16) 第56番の成就法による。他の成就法では、はじめの尊格の名称はジャーリニープラバのかわりにジャーリニークマーラ Jālinikumāra (第58番), スーリヤプラバ Sūryaprabha (第65番) があげられる。
- (17) 光背五仏については松長(1993)がくわしい。また宮治(1993)にも体系的にまとめられている。マンジュヴァラの光背五仏については、いずれにも言及がある(松長 1993: 156-157; 宮治 1993: 39-40)。
- (18) 『サーダナマーラー』第63番 (Bhattacharyya 1968b: 128)。
- (19) 森(1994: 136) 参照。
- (20) Bhattacharyya (1968b: 140, 143, 145)
- (21) Bhattacharyya (1968b: 142)
- (22) この定印の文殊は、頼富・下泉(1994)においてヴァジュラーガ Vajrarāga に比定されている。
- (23) 宮治氏は光背五仏が表された如来像がベンガル地方からの出土であることに注目されている(1993: 36)。

パーラ朝の文殊作例リスト

凡 例

- 番号 (1) 尊名
 (2) 出土地；所蔵者 出土地が不明の場合は所蔵者のみ記載。
 (3) データ 材質，年代，規格等。
 (4) 出典 著者名，刊行年，図版番号の順に記載。複数の文献に含まれる場合，刊行年代順にあげる。76YM, MY83 で始まる番号は，名古屋大学古川研究資料館収蔵の図版整理番号で，宮治昭名古屋大学教授・山田耕二名古屋芸術大学教授の撮影による。頼富氏は二編の論文（1988a, 1988b）の中で，文殊の作例リストを発表されている。各リストに付された通し番号もあわせて示した。
 (5) 図像学上の特徴 印，持物，装身具，坐法，光背，台座等について記載。多面多臂像の場合，面数，臂数も記載。
 (6) 備考 損傷の有無，研究者による比定状況，関係文献など。

- 1~11 Arapacana Mañjuśrī
 12~31 Mañjuvara
 32~34 Mañjuvajra
 35, 36 Sthiracakra Mañjuśrī
 37 Nāmasaṅgiti
 38~64 遊戯坐・与願印
 65~68 遊戯坐・その他の印
 69~87 輪王坐
 88~95 結跏趺坐
 96~98 その他の坐像
 99~130 立像
 131~138 〔図版不鮮明のため詳細不明〕

- | | |
|--|--|
| <p>Arapacana Mañjuśrī</p> <p>1 (1) Arapacana Mañjuśrī
 (2) Nālandā; National Mus.,
 New Delhi
 (3) ブロンズ, ca. 10 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pls. 25, 26;
 Sinha 1983: Pl.28; 頼富 1988a:
 図6, リスト-7; 1988b: 図2, リス
 ト-7; 頼富・下泉 1994: 122
 (5) 剣(頭上に振り上げる)・梵経(胸の
 前)。背面の左右に孔雀の装飾のあ
 る四脚の台座。</p> | <p>2 (1) Arapacana Mañjuśrī
 (2) Vikramaśīla
 (3) ブロンズ
 (4) 頼富 1988a: 図7, リスト-8; 1988
 b: リスト-8
 (5) 剣(頭上に振り上げる)・梵経(胸の
 前)。</p> <p>3 (1) Arapacana Mañjuśrī
 (2) Bodh Gaya
 (3) 石像
 (4) 76YM 小 117-13
 (5) 剣(頭上に振り上げる)・梵経を載せ</p> |
|--|--|

- た睡蓮(?)。光背左右に仏塔の浮彫、
台座左右には獅子の装飾。
- 4 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Amaravatī; Amaravatī Archaeological Mus.
(3) 石像
(4) 頼富 1988a: リスト-5; 1988b: リスト-3
(5) 不明
(6) 図版は発表されていない。
- 5 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Kiching; Bāri padā Mus.
(3) 石像
(4) Sahu 1958: Fig.70
(5) 剣(頭上に振り上げる)・睡蓮(?)。結跏趺坐, 光背左右に蓮華(?)の浮彫。
- 6 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Achutrajpūr, Achutrajpūr Mus.
(3) ブロンズ, 15 cm ht., 10 c. (Mus)
(4) Mitra 1978: Pl. 72
(5) 剣(頭上に振り上げる)・梵経(胸の前)。結跏趺坐, 円形光背。
- 7 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像, 21.5 cm
(4) Mitra 1981: Pl. XXIV(D); 頼富 1988a: 図5, リスト-1; 1988b: 図1, リスト-1
(5) 剣を頭上に振り上げる(右)・胸の前に梵経を持つ(左)。結跏趺坐。奉獻
- 小塔中の浮彫。
- 8 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXIX(C); 頼富 1988a: リスト-2; 1988b: リスト-4
(5) 剣を頭上に振り上げる(右)・胸の前に梵経を持つ(左)。結跏趺坐。
(6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 9 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXIX(D); 頼富 1988a: リスト-3; 1988b: リスト-5
(5) 剣を頭上に振り上げる(右)・胸の前に梵経を持つ(左)。結跏趺坐。蓮台の下に3人の供養者?。
(6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 10 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXX(A); 頼富 1988a: リスト-4; 1988b: リスト-6
(5) 剣を頭上に振り上げる(右)・胸の前に梵経を持つ(左)。左手には蓮華の茎も持つ。結跏趺坐。
(6) 奉獻小塔中の浮彫。小塔の上部は欠損。頭部および右手, 左持物の上部が欠損。
- 11 (1) Arapacana Mañjuśrī
(2) Jalkundi; Dacca Mus.
(3) 石像, ca. 11 c (Saraswati), 2' 7" × 13"

- (4) Bhattasali 1929: Pl. VII(b);
Saraswati 1977: Pl. 27; 頼富
1988a: リスト-6; 1988b: リスト-2
- (5) 右持物欠損(おそらく剣), 左は梵
経。額に化仏。頭上, 両足の背後,
蓮台中央に四体の小さな文殊像。い
ずれも中央の尊に同じ尊容。光背に
は四仏, 向かって左より大日, 不空
成就(?), 阿弥陀, 宝生。台座には蓮
台を支える二人の人物と二人の供養
者。
- (6) Bhattasali は光背の四仏を大日,
宝生, 阿弥陀, 阿闍とする。12世紀
頃の銘文があり, Bhattasali によ
ってベンガリー文字に翻字されてい
る。『サーダナマラー』に周囲の四
文殊と四仏に関する記述があること
と, 類似の作例がジャワから出土し,
現在ベルリン博物館に所蔵されてい
ることも指摘されている。

Mañjuvara

- 12 (1) Mañjuvara
(2) 個人蔵(ハンブルク市在住の Frie-
drich Hewicker)
(3)
(4) Banerjee 1933: Pl. XXXV(b);
Mallmann 1964: Pl. 1; 頼富
1988a: 図9, リスト-8; 1988b: リ
スト-3
(5) 転法輪印, 梵経を載せた睡蓮が左手
から伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。
宝冠。脇侍は右が Sudhanakum-

āra, 左が Yamāntaka。いずれも
主尊の台座からのびた小蓮台に乗る。
台座部分に四供養者, 二獅子などの
浮彫。光背上部に五仏の浮彫。向か
って左より, 大日, 宝生(?), 阿闍
(?), 阿弥陀, 不空成就。光背中
段左右に供養の二女性像。

(6) Mallmann は Vādirāj とする。

- 13 (1) Mañjuvara
(2) Talanda (Rajshahi); Mus. of
the Varendra Research Society
(3) ca. 11 c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977: Pl. 32
(5) 転法輪印, 梵経を載せた睡蓮が左手
から伸びる。右側には睡蓮のみが伸
びる。遊戯坐で獅子に乗る。宝冠。
脇侍は右が Sudhanakumāra, 左
が Yamāntaka。Sudhanakum-
āra は合掌して左脇に梵経をはさ
む。Yamāntaka は右手を上にあ
げ, 左手は杖の上に置く。蓮台左右
に二供養者。光背上部にはおそらく
五仏がいたと考えられるが, 残って
いるのは左下の阿弥陀(定印)のみ。
(6) 左上方から右中段にかけて光背が欠
損。
- 14 (1) Mañjuvara
(2) Mus. of the Varendra Resear-
ch Society
(3) ca. 11 c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977: Pl. 33
(5) 腕の部分が欠損しているため, 印相
は不明。両腕に睡蓮, 向かって左の

- 睡蓮には梵経を載せる。坐法、台座などは前例に同じ。脇侍は右に Sudhanakumāra のみ認められる。光背上部に五仏（印相は左から、定印、不明、転法輪印、与願印あるいは触地印、不明）。その下には仏塔、中段には馬（あるいは獅子）の浮彫。台座左端に供養者。
- 15 (1) Mañjuvara
 (2) Boloi; Mus. of the Varendra Research Society
 (3) ca. 11 c
 (4) Saraswati 1977: Pl. 34
 (5) 腕の部分が欠損しているため、印相は不明。坐法、台座などは前例に同じ。右脇侍が Sudhanakumāra, 左が Yamāntaka。
 (6) 顔、腕の一部、光背上部が欠損。
- 16 (1) Mañjuvara
 (2) Rajshahi, Munsiganj; Dacca Mus.
 (3) ca. 11 c
 (4) 松長 1993: 写真 12
 (5) 転法輪印、梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。右側には睡蓮のみが伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。宝冠。脇侍は右が Sudhanakumāra, 左が Yamāntaka。
- 17 (1) Mañjuvara
 (2) Salban Vihāra, Maināmatī, Comilla Dt.; Maināmatī Site Mus.
 (3)
- (4) Asher 1980: Pl. 249; 頼富 1988a: リスト-9; 1988b: リスト-9
 (5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。椅坐。菩薩形で遊戯坐をとる二脇侍。光背上部に定印の仏坐像。下方には輪王坐の菩薩(?) が手を交差させている。楕円形の光背。
- 18 (1) Mañjuvara
 (2) Bihar; Indian Mus., Calcutta
 (3) 10 c (Mus)
 (4) 76YM 小118-17, 83MY 大66-2, 83MY 小148-23~26; Foucher 1900: Fig. 17; 頼富 1988a: 図 8, リスト-1; 1988b: 図 3, リスト-1, 頼富・下泉 1994: 136 [図 1]
 (5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。遊戯坐。本尊と類似した装身具の女性の二脇侍。光背上部左右に二飛天、台座左右に獅子の浮彫。右足元に供養者。
 (6) 頭頂部が欠損。Mus. の表示は 'Bodhisattva'。
- 19 (1) Mañjuvara
 (2) Nālandā; Nelson Gallery, Atkins Mus., Kansas City, 75-32/4
 (3) ブロンズ, 20.5 cm, 9c 初頭(Shroeder), 9c 半ば(Huntington)
 (4) Shroeder 1981: Pl. 57F; Huntington, S. L. & J. C. Huntington 1990: 44
 (5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。遊戯坐。台座左右に獅

- 子, 光背左右に象と馬。
- (6) Mañjuśrikumāra(Huntington),
Mañjuśrī Siddhaikavīra (Schroeder)
- 20 (1) Mañjuvara
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) 10 c (Saraswati)
(4) 76YM 小111-4; Saraswati 1977: Pl.37
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が両側から伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。獅子の上に座を置いて坐る。
(6) 光背上部欠損。Saraswati 1977: Pl.36 はおそらくこれと同じ作品を逆に現像したもの。
- 21 (1) Mañjuvara
(2) National Mus., New Delhi
(3)
(4) 76YM 小82-17
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が両側(?)から伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。
- 22 (1) Mañjuvara
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3)
(4) 【図2】
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が両側から伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。光背向かって右上に定印仏座像。
- 23 (1) Mañjuvara
(2) Cleveland Mus.of Art, 60.285
(3) 銅と真鍮, 850—950 AD (Schroeder)
- (4) Schroeder 1981: Pl.56A
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が両側から伸びる。遊戯坐で獅子に乗る。
- 24 (1) Mañjuvara
(2) Ratnagiri
(3) 17.8 cm
(4) Mitra 1981: Pl. XC(B); 頼富 1988a: リスト-2; 1988b: リスト-2
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。遊戯坐。
(6) 表面は磨滅しているため, 細部は不明。
- 25 (1) Mañjuvara
(2) Nālandā; Nālandā Mus.
(3) ca. 11 c (Saraswati)
(4) Saraswati 1977: Pl.40
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が両側から伸びる。結跏趺坐。獅子は表現されていない。
- 26 (1) Mañjuvara
(2) Vajragiri; Orissa State Mus.
(3) 8 c (Mus)
(4) 【図3】
(5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左手から伸びる。左右に二脇侍。光背上部左右に二飛天。
(6) 腰から下の部分は光背も含め欠損。
- 27 (1) Mañjuvara
(2) Ratnagiri
(3)
(4) Mitra 1981: Pl.CCCXXXII(B)
(5) 転法輪印(手首から先は欠損)。椅坐。

- 台座左右に獅子。
- (6) 頭部, および手首から先が欠損。
- 28 (1) Mañjuvara
 (2) Ratnagiri
 (3)
 (4) Mitra 1981: Pl. LXVIII(B); 頼富 1988a: リスト-5; 1988b: リスト-6
 (5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左に伸びる。半跏坐。
 (6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 29 (1) Mañjuvara
 (2) Ratnagiri
 (3)
 (4) Mitra 1981: Pl. LXVIII(C); 頼富 1988a: リスト-6; 1988b: リスト-7
 (5) 転法輪印。梵経を載せた睡蓮が左に伸びる(頼富 1988a による)。遊戯坐。
 (6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 30 (1) Mañjuvara
 (2) Ratnagiri
 (3)
 (4) Mitra 1983: Pl. LXVIII(D); 頼富 1988a: リスト-7?; 1988b: 図4, リスト-8
 (5) 転法輪印。椅坐。梵経を載せた睡蓮が左に伸びる。
 (6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 31 (1) Mañjuvara
 (2) Ratnagiri
 (3)
- (4) Mitra 1981: Pl. LXIX(A); 頼富 1988a: リスト-3; 1988b: リスト-4
 (5) 転法輪印。椅坐。睡蓮が左に伸びる。
 (6) 奉獻小塔中の浮彫。
- 32 (1) Mañjuvara
 (2) Ratnagiri
 (3)
 (4) Mitra 1981: Pl. LXIX(B); 頼富 1988a: リスト-4; 1988b: リスト-5
 (5) 転法輪印。遊戯坐。睡蓮が左に伸びる。
 (6) 奉獻小塔中の浮彫。 Mañjughoṣa (Mitra)
- Mañjuvajra**
- 33 (1) Mañjuvajra
 (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
 (3) 石像, ca. 10 c (Saraswati), 11 c (Mus)
 (4) 76YM 小122-36, MY83 小150-35; Banerjee 1933: Pl. XV(c); Saraswati 1977: Pl. 31; 頼富 1988a: 図17; 頼富・下泉 1994: 134
 (5) 三面六臂。剣, 矢, 与願印(以上右手), 梵経(胸の前), 睡蓮, 弓(以上左手)。結跏趺坐。頭飾に阿閼の化仏, 光背上部に智拳印あるいは転法輪印の如来坐像。台座左右に二獅子。光背に銘文。
 (6) Saraswati は Mañjukumāra とする。
- 34 (1) Mañjuvajra

- (2) Bengal; Timken Collection
 (3) 11 c (Coomaraswamy)
 (4) Coomaraswamy 1965: Pl. 229
 (5) 三面六臂。主要な二臂は胸の前で交差させ、残りの右手で剣と矢(?), 左手で睡蓮(梵経を載せる)と弓(?)を持つ。宝冠。結跏趺坐。仏塔を模した光背。
 (6) Arapacana Mañjuśrī (Coomaraswamy)
- 35 (1) Mañjuvajra
 (2) The Art Institute of Chicago
 (3) 真鍮, 12 c, 8.8 cm ht. (Schroeder)
 (4) Schroeder 1981: Pls. 73C, 73D
 (5) 三面六臂。主要な二臂は胸の前で交差させ、残りの右手で剣と矢, 左手で睡蓮(梵経を載せる)と弓を持つ。宝冠。結跏趺坐。

Sthiracakra Mañjuśrī

- 36 (1) Sthiracakra Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri
 (3) 石像, 8-9 c (Sahu)
 (4) Sahu 1958: Fig. 25
 (5) 立像。与願印(右), 剣を載せた睡蓮(左)。髮髻冠。両側に蓮台に座る女性脇侍。
- 37 (1) Sthiracakra Mañjuśrī
 (2)
 (3)
 (4) Banerjee 1933: Pl. XXXVII(b)
 (5) 遊戯坐像。与願印(右), 剣を載せた

睡蓮(左)。化仏。向かって右に Yamāntaka。

Nāmasaṅgīti

- 38 (1) Nāmasaṅgīti
 (2) 個人蔵
 (3)
 (4) 頼富・下泉 1994: 126
 (5) 一面八臂。一組は胸の前で手のひらを前に示し、一組は頭上で合掌、一組は定印、残りの手は体の左右で肘をたて、このうち左手には睡蓮(?)を持つ。宝冠。結跏趺坐。

遊戯坐・与願印

- 39 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus.
 (3) 金属製, ca. 10 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl. 21
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。遊戯坐。円形の光背。
- 40 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., No. 10754
 (3) ブロンズ, 750-850 AD (Schroeder), 9.8 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl. 53B
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。周囲に火炎を配した光背。
- 41 (1) Mañjuśrī
 (2) Sirpur; National Mus., New Delhi, No. 68.148
 (3) 真鍮, 9 c (Schroeder), 21.5 cm

- ht.
- (4) Schroeder 1981: Pl.54G
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
- (6) 台座に 'dronadityah' という銘文。Siddhaikavīra (Schroeder)
- 42 (1) Mañjuśrī
- (2) Sirpur; National Mus., New Delhi
- (3) ブロンズ
- (4) 頼富 1988a: 図 15, リスト-15; 1988b: 図11, リスト-18
- (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。遊戯坐。台座左に供養者。
- (6) Siddhaikavīra (頼富 1988a, 1988b)
- 43 (1) Mañjuśrī
- (2) Bihar
- (3) 750-850 AD (Huntington)
- (4) Huntington, S.L. & J.C. Huntington 1990: Pl.4
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。光背の周囲に, 睡蓮を連ねた文様。台座左右に二獅子。
- (6) Mañjuśrī Kumāra (Huntington)
- 44 (1) Mañjuśrī
- (2) Indian Mus., Calcutta (?), No. B.G. 74
- (3) 石像
- (4) Banerjee 1933: Pl. XIV(b)
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。台座左右に二獅子。
- 45 (1) Mañjuśrī
- (2) 個人蔵
- (3) 真鍮, 9 c (Schroeder)
- (4) Schroeder 1981; Pl.54E
- (5) 与願印(右)。遊戯坐。
- (6) 左手の持物は欠損。Siddhaikavīra (Schroeder)
- 46 (1) Mañjuśrī
- (2) British Mus.
- (3) ブロンズ
- (4) Conzé 1949: Pl.3
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左), 遊戯坐。周囲に火炎を配した光背。
- 47 (1) Mañjuśrī
- (2) Achutrajpur; Achutrajpur Mus., Acc. no. 311
- (3) ブロンズ, 8 c (Mitra), 10.2 cm ht.
- (4) Mitra 1978: Pl.69
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
- (6) 周囲に火炎を配した円形の光背。
- 48 (1) Mañjuśrī
- (2) Achutrajpur; Achutrajpur Mus., Acc. no. 329
- (3) ブロンズ, 10 c (Mitra), 8 cm ht.
- (4) Mitra 1978: Pl.70
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
- (6) 周囲に火炎を配した円形の光背。光背の背面に10世紀の文字による銘文 (Mitra)。

- 49 (1) Mañjuśrī
 (2) Achutrajpur; Achutrajpur
 Mus., Acc. no. 321
 (3) ブロンズ, 10 c (Mitra), 13.3 cm
 ht.
 (4) Mitra 1978: Pl.71
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。
 (6) 周囲に火炎を配した円形の光背。
- 50 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) Mitra 1981: Pl. CLXXII(B)
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。光背上部左右に二飛天。台
 座部分の向かって左に供養者, 右に
 供物。
 (6) 頭髪中心部と顔の一部に破損がある。
- 51 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) Mitra 1981: Pl. CCLXII(A); 頼
 富1988a: 図14, リスト-8; 1988b:
 図9, リスト-10
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。
- 52 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) Mitra 1983: Pl. CCCXXXII(A)
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。台座に三供養者。
 (6) 光背に損傷がある。顔の部分も磨滅。
- 53 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 32図
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。
 (6) 右腕の肘より先の部分と, 光背の大
 半が欠損。顔の部分も磨滅。
- 54 (1) Mañjuśrī
 (2) Vajragiri; Orissa State Mus.
 (3) 石像, 8 c (Mus)
 (4) [図4]
 (5) 与願印(右)。梵経を載せた睡蓮(左)。
 三髻。遊戯坐。台座右下に供養者。
 光背上部に二飛天。
 (6) 保存状態も良好で, 装身具等もよく
 残る。
- 55 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 85図; 頼富 1988b:
 図10, リスト-12 [図5]
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
 遊戯坐。台座右下に供養者。光背上
 部左右に二尊。
 (6) 全体に四角い枠が作られ, その中に
 浮彫で表現。表面はかなり磨滅して
 いる。頼富(1988b)は Siddhai-
 kavira とする。
- 56 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 90図 [図6]

- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。台座右下に二供養者。光背上部左右に二女尊。向かって左の女尊は与願印, 右の女尊は定印(?)。
- 57 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVI(D)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 58 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVII(A)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 59 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVII(B)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 60 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVII(C)
(5) 与願印(右)。梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 61 (2) Mañjuśrī
- (2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVII(D)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。台座の向かって右に供養者。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 62 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXVIII(A)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 63 (1) Mañjuśrī
(2) Ratnagiri
(3) 石像
(4) Mitra 1981: Pl. LXX(B)
(5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
(6) 奉献小塔中の浮彫。
- 64 (1) Mañjuśrī
(2) Sanchi; Archaeological Mus. of Sanchi
(3) 石像, *ca.* 10 c (Saraswati)
(4) Mallmann 1964: Pl. VIII; Saraswati 1977: Pl. 10; 頼富 1988a: 図18, 1990: 図19
(5) 与願印(右), 睡蓮(左)。遊戯坐。台座に孔雀。睡蓮の茎が台座の部分で、蔓草の文様となって表現されている。
(6) 頭部および右腕, 両足の一部に欠損がある。

- 65 (1) Mañjuśrī
 (2) Kurkihār; Patna Mus., No. 9611
 (3) ブロンズ, 1050—1150 AD (Schroeder), 10.1 cm ht.
 (4) Sinha 1983: Pl. 31; Schroeder 1982: 69C
 (5) 与願印(右), 梵経(左)。遊戯坐。
 (6) Mañjuśrī Kumārabhūta (Sinha, Schroeder)

遊戯坐・その他の印

- 66 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., Acc. no. 10754
 (3) ブロンズ, ca. 10 c (Saraswati). 4" × 3.25"
 (4) Saraswati 1977: Pl. 20; Asher 1980: Pl. 171
 (5) 施無畏印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
 (6) 右手首, 光背の上部欠損。
- 67 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta, A24287
 (3) ブロンズ, 750—850 AD (Schroeder), 13 cm ht.
 (4) Mitra 1979: Fig. 115; Schroeder 1981: Pl. 53A
 (5) 施無畏印(右), 剣を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。円形の光背。
- 68 (1) Mañjuśrī
 (2) Kurkihār; Patna Mus., No. 9773

- (3) ブロンズ, 750—850 AD (Schroeder), 13 cm ht.
 (4) 76YM 小106-5; Mallmann 1964: Pl. VII; Gupta 1965: Pl. XXXIII; Schroeder 1981: Pl. 55B
 (5) 右手持物不明(胸の前に置く)。左手は睡蓮。遊戯坐。円形の光背。

- 69 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) Mitra 1981: Pl. CLXXIII(A)
 (5) 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐。
 (6) 腰から下, および左手の持物のみ残存。右手の印は確認できない。

輪王座

- 70 (1) Mañjuśrī
 (2) Gaya
 (3) 石像
 (4) Foucher 1905: Fig. 3
 (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐。向かって左上に仏塔の浮彫。
 (6) 龕の中の浮彫。
- 71 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; National Mus., New Delhi
 (3) 石像, ca. 9 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl. 23
 (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐。楕円の光背。
 (6) Siddhaikavīra (Saraswati)
- 72 (1) Mañjuśrī

- (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta, A24309
- (3) 石像, ca. 10 c. (Saraswati)
- (4) Banerjee 1933: Pl. XV(b); Saraswati 1977: Pl. 30
- (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐。光背の左上部に仏塔の浮彫。台座左右に獅子の浮彫。光背に銘文。
- (6) Mahārājājalilā Mañjuśrī (Saraswati)
- 73 (1) Mañjuśrī
- (2) Salban Vihāra, Maināmatī, Comilla Dt.; Maināmatī Site Mus.
- (3) 石像, 9 c 初期から中期 (Huntington)
- (4) Asher 1980: Pl. 247; Bandyopadhyay 1981: Pl. 61; Huntington 1984: Pl. 253
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。舟形の光背。台座の左右に動物に乗った人物像。
- 74 (1) Mañjuśrī
- (2) Bhubaneswar; Orissa State Mus.
- (3) 石像
- (4) [図7]
- (5) 胸の前に置く(右), 不明(左)。輪王坐。
- (6) 頭部, 右手の一部, 左腕, 左足の一部欠損。
- 75 (1) Mañjuśrī
- (2) Achutraipur; Achutraipur Mus.
- (3) 石像
- (4) Mitra 1978: Pl. 83
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経(左)。輪王坐。文殊像としては珍しい豊満な体軀。円形の頭光の浮彫。
- 76 (1) Mañjuśrī
- (2) Ratnagiri
- (3) 石像
- (4) Mitra 1993: Pl. CCLXXXII(B)
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。火炎を周囲に配した光背。
- 77 (1) Mañjuśrī
- (2) Ratnagiri
- (3) 石像
- (4) Bénisti 1981: Fig. 130
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。
- (6) 奉獻小塔中の浮彫
- 78 (1) Mañjuśrī
- (2) Ratnagiri
- (3) 石像
- (4) Mitra 1981: Pl. LII(D)
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。
- (6) 奉獻小塔中の浮彫。小塔上部は欠損。
- 79 (1) Mañjuśrī
- (2)
- (3)
- (4) Sinha 1983: Pl. 29
- (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。

- (6) Mahārājakīlā Mañjuśrī (Sinha)
- 80 (1) Mañjuśrī
 (2) Tibet-collection Gerd-Wolfgang Essen
 (3) 真鍮, 12 c (Schroeder), 9.0 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl.69A
 (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。
- 81 (1) Mañjuśrī
 (2) The Los Angeles County Mus. of Art, M.75.4.9
 (3) 銅, 12 c (Schroeder), 9.8 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl.69B
 (5) 膝の上に置く(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐。
- 82 (1) Mañjuśrī
 (2) Indian Mus., Calcutta
 (3) 石像
 (4) MY83 小153-37
 (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐。
 (6) 龕の中の浮彫
- 83 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus.
 (3) 石像, ca. 11 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl.38
 (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐で獅子に乗る。巻き貝型の髪。楯円の光背。
 (6) Mañjuvara? (Saraswati)
- 84 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; National Mus., New Delhi
 (3) 石像, ca. 11 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl.39
 (5) 膝の上に置く(右), 睡蓮(左)。輪王坐で獅子に乗る。
 (6) 光背の一部欠損。Mañjuvara? (Saraswati)
- 85 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus.
 (3) 石像
 (4) 頼富 1988a: 図16, リスト-1; 1988b: 図12, リスト-1; 頼富・下泉 1994: 124
 (5) 胸の前(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐で獅子に乗る。
 (6) 光背の上部欠損。Mañjuhoṣa (頼富 1988a, 1988b; 頼富・下泉 1994)。
- 86 (1) Mañjuśrī
 (2) Kurkihār; Patna Mus., No.9622
 (3) 真鍮, 10 c. (Schroeder); 17.7 cm
 (4) Schroeder 1981: Pl.62F; Sinha 1983: Pl.30
 (5) 胸の前(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。遊戯坐で獅子に乗る。円形の頭光。傘蓋。台座の向かって左に供養者。
 (6) 銘文 'vaṇika-māṇekasya jānūśu (sū) ta' (Schroeder による)。Schroeder は Vāgīśvara とする。
- 87 (1) Mañjuśrī
 (2) Patna Mus.

- (3) 石像
 (4) Banerjee 1933: Pl. XXXV(a)
 (5) 胸の前(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。輪王坐で獅子に乗る。
 (6) 光背の上部欠損。光背の上部左右に二飛天の一部が認められる。
- 88 (1) Mañjuśrī
 (2) Magadha; Indian Mus., Calcutta
 (3)
 (4) Foucher 1900: Fig. 15
 (5) 胸の前(右), 睡蓮(左)。輪王坐で獅子に乗る。
 (6) Foucher の図版はスケッチのため詳細は不明。
- 結跏趺坐
- 89 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā
 (3) ストッコ
 (4) 76YM 小108-10; Asher 1980: Pl. 71
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。
 (6) 頭部, 左手, 左足の一部欠損。Asher の図版では頭部に欠損は認められない。
- 90 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., 08023
 (3) ブロンズ, 7 c (Schroeder), 11.4 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl. 48D
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。舟形の光背(一部欠損)。
- (6) Mañjuśrī Siddhaikavīra? (Schroeder)
- 91 (1) Mañjuśrī
 (2) Patna Mus., No. 8349
 (3) 真鍮, 7 c (Schroeder), 19.7 cm ht.
 (4) 76YM 小105-10; Schroeder 1981 Pl. 48F
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。舟形の光背。
- 92 (1) Mañjuśrī
 (2) Bodh Gaya; Bodh Gaya Mus.
 (3) 石像
 (4) 76YM 小114-3
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。
- 93 (1) Mañjuśrī
 (2) Sirpur
 (3) 石像
 (4) 頼富 1991: 図19
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。
 (6) Siddhaikavīra (頼富)
- 94 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3)
 (4) Mitra 1983: Pl. CCXCIX(A)
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。結跏趺坐。舟形の光背。
- 95 (1) Mañjuśrī
 (2) Bengal
 (3) 10 c (Sivaramamurti)
 (4) Sivaramamurti 1957: Fig. 31
 (5) 剣(右), 梵経(左)。結跏趺坐。
 (6) Mañjughoṣa (Sivaramamurti)

- 96 (1) Mañjuśrī
 (2) Sārnāth Mus.
 (3) 石像
 (4) 頼富・下泉 1994: 130
 (5) 定印。結跏趺坐。
 (6) Vajrarāga (頼富・下泉)

その他の坐像

- 97 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
 (3) ブロンズ, *ca.* 10 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl.19
 (5) 花のようなもの (右), 睡蓮 (左)。蓮華座 (padmāsana; Saraswati による)。火炎を周囲に配した円形の光背。
 (6) Siddhaikavīra (Saraswati)
- 98 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus.
 (3) ブロンズ, *ca.* 9 c (Saraswati)
 (4) Saraswati 1977: Pl.22
 (5) 持物なし (右), 睡蓮 (左)。安樂座 (sukhāsana; Saraswati による)。
 (6) Siddhaikavīra (Saraswati)
- 99 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; National Mus., New Delhi, 49.130
 (3) *ca.* 10 c. (Saraswati), 9 c (Schroeder)
 (4) 76YM 小82-22, MY83 小123-5; Saraswati 1977: Pl.29; Schroeder 1981: 59G

- (5) 剣 (右), 睡蓮 (左)。遊戯坐。円形の光背。傘蓋。
 (6) Sthiracakra (Saraswati)

立像

- 100 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; British Mus., Acc. no.1924
 (3) 石像, 36" × 11"
 (4) Asher 1980: Pl.165
 (5) 与願印 (右), 睡蓮 (左)。
 (6) 頭部欠損。
- 101 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., #11180
 (3) 金属製, 7 c 末~8 c 初頭 (Huntington), 20.2 cm ht.
 (4) Huntington 1984: Pl.161
 (5) 与願印? (右), 欠損 (左)。
 (6) 右腕の先と左腕欠損。
- 102 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., #10511
 (3) 黒玄武岩, *ca.* 10 c (Saraswati), 7 c (Huntington), 74 cm ht.
 (4) 76YM 大62-13; 76YM 小109-6; Saraswati 1977: Pl.17; Asher 1980: Pl. 166; 宮治 1981: 図74; Huntington 1984: Pl.124; 頼富 1988a: 図10, リスト-2; 1988b: リスト-2; 頼富・下泉 1944: 132
 [図8]
 (5) 与願印 (右), 睡蓮 (左)。堂々とし

- た体軀。髪はひとつの鬘に結び、両肩に垂れる。
- (6) 光背の一部欠損。Siddhaikavira (Saraswati 1977; 頼富 1988a, 1988b), Mañjuśrī Kumāra (Huntington 1984), Maitreya (Mus).
- 103 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., #10511
 (3) 黒玄武岩, ca. 9 c (Saraswati), 10 c (Mus)
 (4) 76YM 小109-11; Saraswati 1977: Pl.18; 頼富 1988a: 図12, リスト-5; 1988b: 図6, リスト-5
 【図9】
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。
 (6) Siddhaikavira(Saraswati 1977; 頼富 1988a, 1988b), Maitreya (Mus).
- 104 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Nālandā Mus., 11176
 (3) ブロンズ, 650—750 AD (Schroeder), 10.8 cm? ht.
 (4) 76YM 小112-2; Schroeder 1981: Pl.47G
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。
 (6) Mañjuśrī Siddhaikavira (Schroeder). 光背の大半が欠損。
- 105 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; National Mus., New Delhi, 49.133
 (3) ブロンズ, 7 c (Schroeder), 30.0 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl.50A
 (5) 与願印(右), 胸に当てる(左)。
 (6) Mañjuśrī Siddhaikavira (Schroeder)
- 106 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
 (3) 銅, 650—700 AD (Schroeder), 21.5 cm ht.
 (4) Schroeder 1981: Pl.50B
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。
 (6) Mañjuśrī Siddhaikavira (Schroeder)
- 107 (1) Mañjuśrī
 (2) Kurkihār, Patna Mus., No.9610
 (3) 真鍮, 10 c (Schroeder), 20.5 cm ht.
 (4) Sinha 1983: Pl.27; Schroeder 1981: Pl.63I; 頼富 1988a: リスト-3; 1988b リスト-3
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。
 (6) Siddhaikavira (Sinha)
- 108 (1) Mañjuśrī
 (2) Gaya; Patna Mus.
 (3) 石像
 (4) 76YM 小101-11, 大59-11; Asher 1980: Pl.145 【図10】
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。「表現が重厚で硬い」(Asher, p.77)。
- 109 (1) Mañjuśrī
 (2) Patna Mus.
 (3) 石像

- (4) 76YM 大60-8; 小101-31 [図11]
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。均等足の姿勢。
- 110 (1) Mañjuśrī
- (2) Nālandā; National Mus., New Delhi, 59.528
- (3) ca.7 c (Saraswati), 9 c (高田・上野), 42.5" × 14.5"
- (4) 76YM 小90-31, MY83 小122-6, 7; Mallmann 1964; Pl.III; 高田・上野 1965: 図200, 図202; Saraswati 1977: Pl.13; Asher 1980: Pl.164; 頼富 1988a: リスト-1; 1988b リスト-1
- (5) 与願印(右), 睡蓮(左), 三髻が浮彫で表現される。向かって左下に四臂の Yamāntaka。持物等は蓮華, 剣, 斧, 与願印。
- (6) 観音菩薩立像(高田・上野), Avalokiteśvara (Mallmann), St-hiracakra (Saraswati)
- 111 (1) Mañjuśrī
- (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
- (3) 石像, ca. 9 c (Saraswati)
- (4) Saraswati 1977: Pl.14 [図12]
- (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。向かって左に Yamāntaka (斧の上に右腕を置く)。
- (6) Siddhaikavīra (Saraswati)。
- 112 (1) Mañjuśrī
- (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
- (3) 石像, ca. 10 c (Saraswati)
- (4) Saraswati, 1977: Pl.24
- (5) 与願印(右), 蓮蓮(左)。阿闍の化仏。向かって左に合掌した脇侍。
- 113 (1) Mañjuśrī
- (2) Bodh Gaya Mus.
- (3) 石像
- (4) 76YM 大63-1, 7
- (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。宝冠。等足立の姿勢。向かって左に杖を持つ男性脇侍。右に合掌する女性脇侍。光背の一部は後補。
- 114 (1) Mañjuśrī
- (2) Guneri; Bodh Gaya Mus., #217
- (3) 黒玄武岩, ca. 10 c (Saraswati), ca 10 c (Huntington), 127 cm ht.
- (4) 76YM 小115-17~19; Saraswati 1977: Pl.18; Bénisti 1981: Fig. 98; Huntington 1984: Pl.119; 頼富 1988a: 図11, リスト-4; 1988b: 図5. リスト [図13]
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。向かって左側に法螺貝?を持った男性脇侍, 右側には払子を持った女性脇侍。光背の左上に仏塔の浮彫。
- (6) Siddhaikavīra (Saraswati 1977; 頼富 1988a, 1988b), Mañjuśrī Kumāra (Huntington 1984), Maitreya (Mus).
- 115 (1) Mañjuśrī
- (2)
- (3) ブロンズ?

- (4) Sinha 1983: Pl.26
- (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。両側に脇侍女性。台座左下に供養者。
- (6) 右腕の先端欠損。 Siddhaikavīra (Sinha)
- 116 (1) Mañjuśrī
- (2) Sārnāth; National Mus., New Delhi
- (3) 石像, 7 c (Saraswati, LaPlante)
- (4) Saraswati 1977: Pl.12; LaPlante 1964: Fig.7
- (5) 与願印?(右), 睡蓮(左)。女性の二脇侍。阿闍の化仏。
- (6) Siddhaikavīra (Saraswati)。右腕欠損。
- 117 (1) Mañjuśrī
- (2) Bhangor (West Bengal); Asutosh Mus. of Indian Art, Calcutta Univ.
- (3) 石像, ca. 11 c (Saraswati)
- (4) Saraswati 1977: Pl.15
- (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。光背上部に五仏。向かって左より宝生, 大日, 阿闍, 阿弥陀, 不空成就。大日は転法輪印を示す。向かって左に Sudhanakumāra (合掌した手に梵経をはさむ), 右に Yamāntaka (斧に手を置く)。宝生の下に蓮華の浮彫。台座に複数の供養者。
- (6) 『サーダナマーラー』によれば Sudhanakumāra と Yamāntaka を脇侍にするのは Mañjughoṣa であるが, 図像上の特徴はこの作例に一致しない。もっとも近い特徴を持つのは Siddhaikavīra(以上 Saraswati)。
- 118 (1) Mañjuśrī
- (2) Kurkihār; Patna Mus., No.9599
- (3) 真鍮, 9 c 末~10 c 初頭 (Huntington), 10 c (Schroeder), 17.7 cm ht.
- (4) 76YM 小 104-14; Schroeder 1981: Pl.65D; Sinha 1983: Pl.25; Huntington 1984: Pl.176
- (5) 施無畏印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
- (6) Mañjuśrī Siddhaikavīra (Schroeder); Mañjuśrī Kumāra (Huntington)
- 119 (1) Mañjuśrī
- (2) Bihar; Indian Mus., Calcutta
- (3) 石像, ca. 9 c (Saraswati)
- (4) 76YM 小118-28; MY83 小149-12, 13; Saraswati 1977: Pl.16
- (5) 施無畏印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。巻き貝型の髪。
- (6) Siddhaikavīra (Saraswati).
- 120 (1) Mañjuśrī
- (2) Nālandā; Indian Mus., Calcutta
- (3) ブロンズ, 12 c (Schroeder), 25.1 cm ht.
- (4) Schroeder 1981: Pl.71D
- (5) 施無畏印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。右側にも睡蓮。

- (6) Mañjuśrī Siddhaikavīra (Schroeder)。
- 121 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) Mitra 1983: Pl. CCCLVI(B)
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。
- 122 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 116図
 (5) 与願印(右), 不明(左)。
 (6) 光背のかなりの部分が欠損し, 尊像の表面も磨滅。
- 123 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 107図; 頼富 1988b: 図8, リスト-8
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。向かって右下に右手に杖(?)を持つ Yamāntaka。
 (6) Siddhaikavīra (頼富 1988b)
- 124 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 81図【図14】
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。向かって左下に睡蓮を持ってうづくまる女性脇侍, 右下には本尊の睡蓮の茎を持ち, 左手を膝に当てて立つ脇侍。光背左上部に飛天。
 (6) 両腕欠損。
- 125 (1) Mañjuśrī
 (2) Ayodhyā
 (3) 石像
 (4) Sahu 1968: Fig. 65
 (5) 胸の前(右), 梵経を載せた睡蓮(左), 宝冠。女性の二脇侍。光背上部に二飛天。右側にも睡蓮の浮彫。
- 126 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 挿図1, 61図; Mitra 1983: Pl. CCXLVIII(C)
 (5) 与願印(右), 蓮(左)。向かって左側に蓮華?を持った女性脇侍, 右側には払子を持った女性脇侍。光背の上部左右に二飛天。本尊の右肩の上部に蓮華の浮彫。台座に二匹のナーガ, 二竜王, 供養者, 瓶の浮彫。
 (6) 頭部, 左腕欠損。
- 127 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri?; Indian Mus., Calcutta
 (3) 石像
 (4) 76YM 大66-15; 小120-3, 4; MY83 小152-20~23,
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。宝冠。蓮台に座る女性の二脇侍。光背上部欠損。
- 128 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和 1982: 122図; 頼富 1990: 図75

- (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。向かって左下に与願印を示す女性脇侍, 右下には剣を持つ女性脇侍。
- (6) 光背上部および両腕の一部欠損。
- 129 (1) Mañjuśrī
 (2) Lalitagiri; 現地収蔵庫
 (3) 石像
 (4) 佐和1982: 111図; 頼富 1988b: 図7, リスト-7
 (5) 与願印(右), 梵経を載せた睡蓮(左)。向かって左下に, 左手に香炉(?)を持ってうづくまる脇侍。右下には二供養者。光背左上部に飛天。
 (6) Siddhaikavira (頼富 1988b). 光背右上部欠損。
- 130 (1) Mañjuśrī
 (2) Kendrāparā; Indian Mus., Calcutta
 (3) 石像
 (4) Sahu 1968: Fig. 37
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。宝冠。蓮台に座る女性の二脇侍。光背上部に二飛天。
- 131 (1) Mañjuśrī
 (2) Ratnagiri
 (3) ca. 7 c (Saraswati), 9 c (インド美術), 42.5" × 14.5"
 (4) Bénisti 1981: Fig. 132; 佐和 1982: 28図; Mitra 1983: Pl. CCCXXXVI(A); 頼富1988a: 図13, リスト-6; 1988b リスト-6 [図15-20]
 (5) 与願印(右), 睡蓮(左)。豪華な宝冠。光背の左右に蓮華の茎が伸び, その上に触地印(向かって左)と定印(右)の如来像が乗る。脇侍として, 仏子と睡蓮を持つ二女性。右の女性には損傷がある。
 (6) 二臂宝冠文殊菩薩立像(佐和)。上記の刊行物の図版では右の脇侍の女性は損傷は認められない。
- 不 明
- 132 (1) Mañjuvara
 (2) Nālandā Mus.
 (3) 石像
 (4) 76YM 小111-7
 (5)
- 133 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā Mus.
 (3) 石像
 (4) 76YM 小111-8
 (5)
 (6) 胸から上のみ残存。
- 134 (1) Mañjuśrī
 (2) Nālandā Mus.
 (3) 石像
 (4) 76YM 小110-35
 (5)
- 135 (1) Mañjuśrī
 (2) Sārnāth Mus.
 (3) 石像
 (4) MY83 小141-10
 (5)
 (6) 両腕, 足の一部, 光背など欠損。
- 136 (1) Mañjuśrī

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| (2) Nālandā Mus. | (2) Indian Mus., Calcutta |
| (3) 石像 | (3) |
| (4) 76YM 小110-36 | (4) MY83 小151-27 |
| (5) | (5) |
| (6) Bodhisattva (Mus) | (6) Mañjuśrī Kumārabhūta |
| 137 (1) Mañjuśrī | (Mus) |
| (2) Indian Mus., Calcutta | 139 (1) Mañjuśrī |
| (3) | (2) Indian Mus., Calcutta |
| (4) 76YM 小123-29; MY 83小151-23 | (3) |
| (5) | (4) 76YM 小124-1; MY83 小151-28 |
| 138 (1) Mañjuśrī | (5) |

参考文献

- 伊東照司 1981 「エローラ石窟寺院の仏教図像」『仏教芸術』 134 : 84-119。
- 井上曙夫 1984 「経典と図像——文殊菩薩に関して」『密教図像』 3:41-58
- 金岡秀友博士還暦記念論文集刊行会 1988 『金岡秀友博士還暦記念論文集——大乘菩薩の世界』 倭成出版社。
- 金子啓明 1992 『日本の美術 314 文殊菩薩像』 至文堂。
- 佐久間留理子・宮治昭 1991 「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』 9:107-129。
- 佐和隆研(編) 1982 『密教美術の原像』 法蔵館。
- 下松 徹 1994 「文殊菩薩 そのかたちと信仰」『高野山大学密教文化研究所紀要』 8:49-93。
- 菅沼 晃 1988 「文殊・普賢」『金岡秀友博士還暦記念論文集——大乘菩薩の世界』 倭成出版社 pp.67-83。
- 高田 修・上野照夫 1965 『インド美術Ⅰ・Ⅱ』 日本経済新聞社。
- 松長恵史 1993 「光背五仏について」『高野山大学密教文化研究所紀要』 6:145-162。
- 宮治 昭 1981 『インド美術史』 吉川弘文館。
- 宮治 昭 1985 『インド・パキスタンの仏教図像調査』 弘前大学。
- 宮治 昭(代表) 1985 『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』(平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書)。
- 森 雅秀 1990 「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』 6:69-111。
- 森 雅秀 1994 「『完成せるヨーガの環』第1章「文殊金剛マンドラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』 7:113-142。
- 森 喜子 1990-1992 「パーラ朝の女尊の図像的特徴(1)~(3)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』 6:113-155 ; 7:155-192 ; 8:69-114。
- 山下博司 1992 「重ねられるイメージ・すり替えられる神々——南アジアの宗教に見られるイメージ操作と改宗のストラテジー」『東アジア, 東南アジアにおける宗教, 儀礼, 社会——「正統」, ダルマの波及・形成と変容』(Monumenta Serindica No.26) 石井 溥編 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.35-37。
- 頼富本宏 1985 「文献資料に見る文殊菩薩の図像表現」『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』 平楽寺

- 書店, pp.321-338.
- 頼富本宏 1988 「インド現存の文殊菩薩像」『成田山仏教研究所紀要(仏教思想史論集)』 11:683-719。
- 頼富本宏 1988 「パーラ朝期の文殊菩薩像」『仏教芸術』 178:102-120。
- 頼富本宏 1990 『密教仏の研究』 法蔵館。
- 頼富本宏 1991 「中インド・シルプル遺跡の仏教美術」『仏教芸術』 191:40-57。
- 頼富本宏・下泉全暁 1994 『密教仏像図典——インドと日本のほとけたち』 人文書院。
- Asher, F.M. 1980 *The Art of Eastern India, 300—800*. Delhi:Oxford University Press.
- Bandyopadhyay, B.1981 *Metal Sculptures of Eastern India*. Delhi: Sundeep Publishers.
- Banerjee (Banerji), R.D. 1981 (1933) *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*. New Delhi:Ramanand Vidya Bhawan.
- Bénisti, Mireille 1981 *Contribution à l'étude du stūpa bouddhique indien: les stūpa mineurs de Bodh-Gayā et de Ratnagiri*. Publication de l'École Française d'Extrême-Orient Vol.125. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Bhattacharyya, Benoytosh 1968a(1958) *The Indian Buddhist Iconography Mainly Based on the Sāghanamālā and Other Cognate Tantric Texts of Rituals*. 2nd ed. Calcutta: K.L.Mukhopadhyay.
- Bhattacharyya, Benoytosh 1968b (1925) *Sāghanamālā* (2 vols.). G.O.S. Nos. 26, 41. Baroda: Oriental Institute.
- Bhattachali, Nalini Kanta 1929 *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculpture in the Dacca Museum*. Dacca: Dacca Museum Committee.
- Conzé, Edward 1949 On the Iconography of the Prajñāpāramitā, *Oriental Art* 2:47-52.
- Coomaraswamy, A.K. 1965 *History of Indian and Indonesian Art*. New York.
- Getty, Alice 1962(1928) *The Gods of Northern Buddhism*. Tokyo: Charles E. Tuttle.
- Foucher, A. 1900 *Étude sur l'iconographie bouddhique de l'Inde, d'après des documents nouveaux*. 2 vols. Bibliothèque de l'école des hautes études: Sciences religieuses vol. 3, pts. I-II, Paris: Ernest Leroux.
- Gupta, Palmeshwari Lal, ed. 1965 *Patna Museum Catalogue of Antiquities*. Patna Museum.
- Huntington, Susan L.1984 *The "Pāla-Sena" Schools of Sculpture*. Studies in South Asian Culture Vol. X, Leiden: E.J.Brill.
- Huntington, Susan L. & John C.Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree: The Art of Pala India (8th-12th centuries) and Its International Legacy*. Seattle: Dayton Art Institute.
- LaPlante, John D. 1964 A Pre-Pāla Sculpture and its Significance for the International Bodhisattva Style in Asia. *Artibus Asiae* 26:3-4, 247-284, 290-292.
- Liebert, Göesta 1976 *Iconographic Dictionary of the Indian Religions*. Studies in South Asian Culture Vol.V Leiden: E.J.Brill.
- Malandra, Geri Hockfield 1993 *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora*. Albany: State University of New York Press.
- Mallmann, Marie-Térèse de 1964 *Étude iconographique sur Mañjuśrī*. Publication de l'École Française d'Extrême-Orient Vol.55, Paris: École Française d'Extrême-Orient.
- Mitra, Debala 1978 *Bronzes from Achutrajpur, Orissa*. Delhi: Agam Kala Prakashan.
- Mitra, Debala 1981 *Ratnagiri(1958—61)*. Vol.I. Memories of the Archaeological Survey of India. No.80. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Mitra, Debala 1983 *Ratnagiri(1958—61)*, Vol.II. Memories of the Archaeological Survey

- of India. No.80. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Sahu, N.K. 1958 *Buddhism in Orissa*. Cuttak: Utkal University.
- Saraswati, S.K. 1977 *Tantrayāna Art: An Album*. Calcutta: Asiatic Society.
- Schroeder, U. von 1981 *Indo-Tibetan Bronzes*. Hong Kong: Visual Dharma Publications.
- Sinha, K. 1983 *The Early Bronzes of Bihar*. New Delhi: Ramanand Vidya Bhawan.
- Sivaramamurti, C. 1957 Iconographic Gleanings from Epigraphy. *Arts Asiatiques* 4(1): 35-70.



図4 文殊坐像（オリッサ州立博物館）



図3 マンジュヴァラ（オリッサ州立博物館）



図1 マンジュヴァラ (インド博物館)



図2 マンジュヴァラ (ナールンダー博物館)



図5 文殊坐像（ラリタギリ現地収蔵庫）



図6 文殊坐像（ラリタギリ現地収蔵庫）

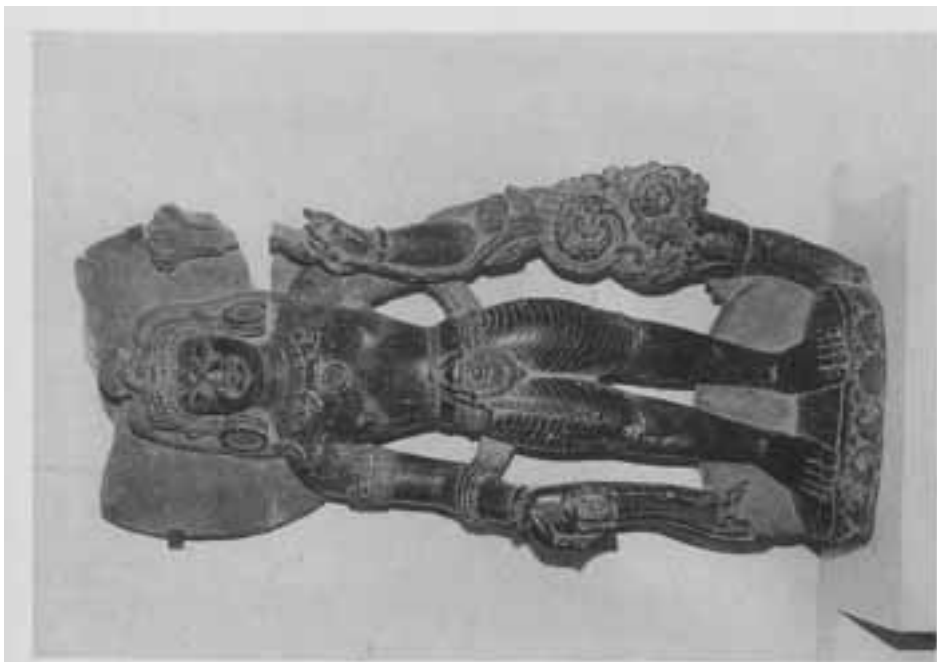


図6 文殊立像（ナールランダー博物館）



図7 文殊坐像（オリッサ州立博物館）

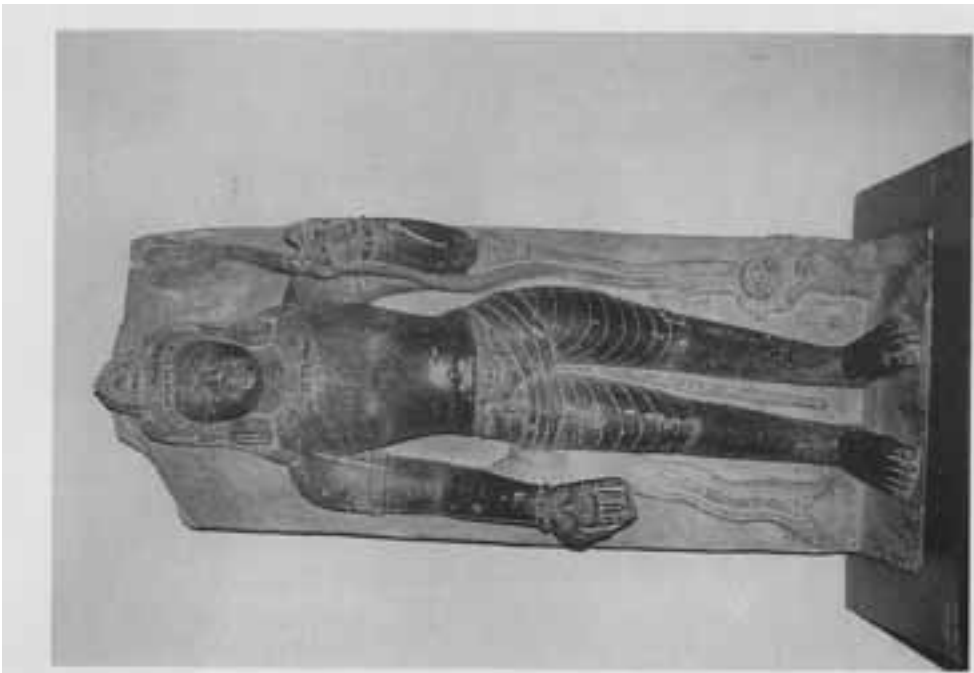


図10 文殊立像（パトナ博物館）



図9 文殊立像（ナールランダー博物館）

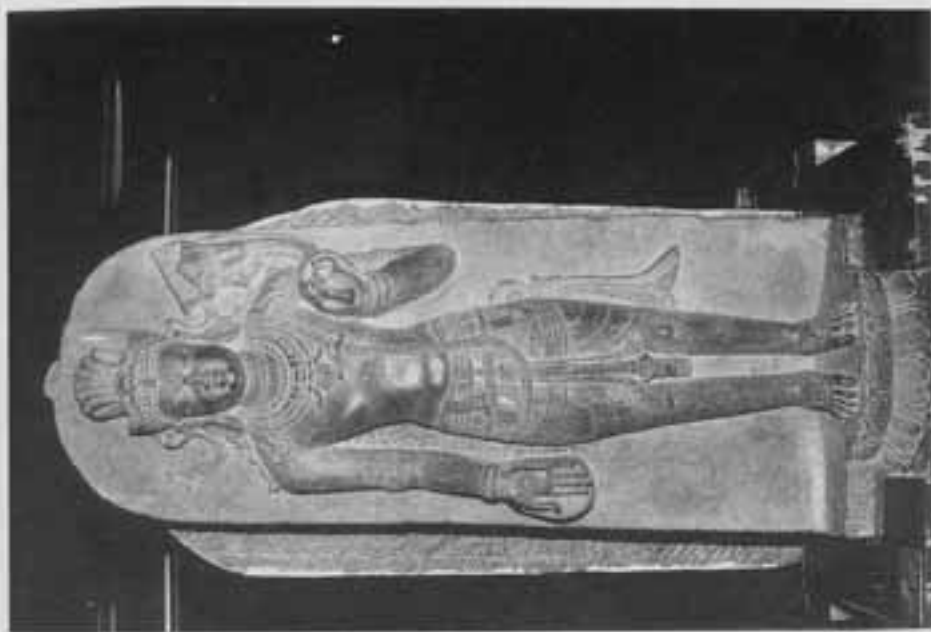


図11 文殊立像（バトナ博物館）



図12 文殊立像（インド博物館）



図14 文殊立像（ウリタキリ現地祝儀庫）



図13 文殊立像（ポーランドヤ一博物館）



図15 文殊立像（ラトナネリ現地僧院跡）



図16 図15部分（頭部）



図17 図15部分（光背の触地印仏坐像）



図18 図15部分（光背の梵印仏坐像）



图19 图15部分（右侍女尊）



图20 图15部分（左侍女尊）